

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所

〒259-1293 平塚市土屋 2946

神奈川大学湘南ひらつかキャンパス

TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

教員と学生の間で起こる

セクシュアル・ハラスメント

大庭 絵里

セクシュアル・ハラスメントという言葉が日本に導入された1980年代から約20年。いまでは誰でも知っている言葉である。この言葉の普及のおかげで、自分が受けた性的言動をどのように「問題化」したらよいのかもわからず泣き寝入り状態にあった被害者たちは、クレームしやすくなった。

その一方で、「セクハラ」は客観的な定義が困難であり、結局は、性的言動を受けた側(多くの場合は女性)がどのように感じ、どのように定義するのが鍵となるため、「加害」「被害」についての認識にズレが生じてしまうことがある。

とりわけ、大学における教員と学生との関係においては、何が問題となるのだろうか。

学生と教員との関係が親しくなればなるほど、「やってはいけない」「やってよい」行為の境界はあいまいとなる。性関係の強要は「やってはいけない」行為であると多くの人が認識している。では、教員が学生に対して性的なジョークを言ったり、身体にふれる行為をするとき、それが「親しさ」の表現であって問題ではないと言い逃れできるだろうか。相手は自分を受け入れるはずだという甘い幻想がそこにはないだろうか。教員にとってジョークまたは「親しさ」であったとしても、それを受ける学生や見

ている学生にとっては大迷惑であり、苦痛である。

しかし、学生が教員にNOを申し立てることは難しい。成績、進級や卒業などの決定権は教員側にあり、学生と教員間にある権力関係に学生は敏感である。また、まさか教員が「セクハラ」するとは思っておらず、教員による「セクハラ」の言動は大きなショックを学生に与える。

特に、学生が女性である場合、女は男についてくるもの、女のNOはYESであるといった、男性優位社会特有のジェンダー観や性差別的慣習が教員の言動に入りこんではいないだろうか。さらには、異性愛を当然視することから生じる偏見が教員の言動に根強く反映されていないだろうか。

「セクハラ」は、単なる「失礼な」「道徳的配慮に欠ける行為」などではない。自分の性的言動を相手に押しつけ、相手の自由と権利を脅かす人権侵害の行為である。被害者の心身の苦痛もはかりしれない。

気軽なジョークと性行為の強要は連続線上でつながっている。「親しさ」の表現、学生と教員との距離、日本社会における性の多様性など、教員個人には多くの考えるべき課題がある。もちろん、セクシュアル・ハラスメントに対する大学としての取り組みが重要であることはいままでもない。

(所員／おおば・えり)

国際経営研究所主催・フォーラム

2008年度のフォーラムは、(株)ミセスリビング代表、宇津崎光代氏と、住育研究所代表、宇津崎友見氏を招いて、「家族が仲良くなる住まいは、ここが違う」のタイトルで、11月21日(金)、11:00~12:30、湘南ひらつかキャンパス6号館302講堂で開催します。

宇津崎光代氏は教師から建築の世界に転換し、現在、講演、TV番組出演や新聞雑誌にも多く登場し注目をあびています。宇津崎友見氏は、心と住まいの心理的繋がりを体系化した、「住育コミュニケーション」セミナーを開催し、楽しくすぐ実践できると大好評です。宇津崎友見氏も講演、新聞、雑誌などで幅広く活動しています。両氏はすでに多くの講演会で高い評価を受けています。ぜひ参加してください。

論文投稿募集

国際経営研究所では、年1回の発行であった『国際経営フォーラム』を、学外からの投稿を促進することにより年2回の発行に変更します。学外へは、すでに8月に全国の主要大学に募集要項送付を完了しています。対象は大学院生も含む研究者及び実務家で、特に若手研究者に研究成果発表の場を提供したいと考えています。対象テーマは経営学に関する理論的・実証的研究で、提出期限は2008年12月12日(金)です。投稿論文は2名の査読委員により審査され、掲載の可否が決定されます。2009年3月の発行を予定しています。大学院生を担当している先生方は、院生の研究成果投稿を促していただくよう、お願いいたします。審査は研究所運営委員により対応しますが、内容によっては論文審査委員として教員の皆様にもご協力をあおぐ場合もあると思います。ご協力、よろしくお願いたします。投稿詳細は下記の投稿規程を参

照してください。

投稿規定：1) 投稿原稿は、日本語あるいは英語で書かれた未公開論文とする。2) 掲載論文の著作権は、執筆者に帰属する。ただし、掲載されたことをもって、Web上に公開することを了承したものとみなす。3) 原稿は原則としてワープロによる横書きとする。本文、注、参考文献、図表を含め、日本語の場合は24,000字以内(ただし、注と文献リストの文字数は0.67掛けで計算)、英語の場合は8,000語以内(A4でダブルスペース)とする。4) 投稿論文は、広く認められた学術論文の作成作法に基づいて作成するものとする。なお、掲載決定後に、統一書式に変更するものとする。5) 引用文献は、注により著者名と出版年を表示することで対応し、原稿の終わりに参考文献を表記するものとする。6) 投稿論文とは別に、論文題名(英文タイトル含む)、投稿者の氏名、住所、所属機関、肩書き、電話・FAX・E-mail等の連絡先を記入した表紙をつける。7) 投稿に際しては、原稿のコピーおよび論文要旨(原稿が日本文の場合は約1,000字、同英文の場合は約400語)を各5部提出すること。8) 投稿原稿の採否は、編集委員会が委嘱する2名のレフリーの審査に基づき、編集委員会が決定する。9) 採用が決定された原稿については、改めて統一体裁形式に即した最終原稿を収録した電子記憶媒体の提出を求める。10) 校正時における原稿の訂正は、原則として認めない。なお、原稿料は支払わず、原稿は返却しない。ただし、本誌5部と抜き刷り50部を無料で進呈する。

今回の投稿論文の募集準備には、出版広報担当委員の小島大徳准教授が論文募集パンフレットの作成から、主要大学への送付、投稿規程の作成等、すべて担当していただきました。小島先生の貢献に心より感謝します。

リアルの追求と会計国際化

真鍋明裕

最近、何でもかんでもリアルさを追求する動きが顕著になってきているように思われる。テレビの映像は「地デジ」によってよりくっきり、はっきりしたものとなる。CG技術の発達も目覚ましい。テレビゲームなどは、1990年代後半以降、リアルさの追求ということに関しては、とくに一直線に突き進んできたという印象がある。しかし、それははたして本当に「いいこと」なのだろうか。

ゲームに関して言えば、リアルさを追求することで失われるものもある。よく言われるのは、見た目がリアルになると想像力を働かせる余地がなく、ということである。映像にリアリティがあると、「この登場人物は、このような背格好で、このような顔をしている」ということをすでに決められてしまっている。ここには、想像をはたかせる余地はほとんどない。かつて、映像が「稚拙」であった時代は、ゲームの映像を見て、プレイしている各人が作品中の風景や人物について自分自身で想像を膨らませていたのだが。

かかる視点で最近の会計基準の国際的統一化の動向を眺めると、同様の特徴を見いだすことができる。情報利用者にとっての役立ち（有用性）という観点から、国際会計基準審議会（IASB）が企業の業績の尺度として重視しているのが、包括利益である。包括利益とは、大ざっぱに言えば、期首と期末を比較したときの、企業の純資産の増分である。そこには、経営者の意図が反映される「当期純利益」だけでなく、保有資産の時価変動分など、経営者の意図が反映されない利益も含まれる。

IASBは、企業の業績の尺度として、包

括利益がより適切であるという考えである。なぜかというと、当期純利益には（たとえば収益や費用の認識をどの時点で行うのか等に関して）経営者の恣意性が入る余地があるが、包括利益は、資産・負債の現時点での価値を測定することから求められるため、客観的であり、それゆえ有用であると考えるからである。つまり、包括利益の方が、企業のよりリアルな姿を映し出しており、その方が情報として役立つのだ、とIASBは考えているといえる。しかし、本当にそうだろうか。企業の利益と株価との関連性について検討した実証研究には、包

括利益よりも当期純利益の方が関連性が高いという結果が得られたものも少なくない。ということは、IASBが「リアル」と考える利益よりも、経

営者の意図が反映された利益の方が役に立つ、ということも考えられるのである。

しかし、IASBの推進する国際会計基準導入の動きはますます広がっている。私の研究するドイツ会計においても、その影響ははっきりと表れてきている。昨年ドイツ法務省から公表された、「会計法現代化法」の法案においては、たとえば、それまで原価評価であった有価証券について、時価評価が規定されるなど、ドイツ商法会計が国際会計基準へと接近する傾向が見て取れる。当該法案で提起されている内容はドイツ会計の根本的な原則を変化させる可能性があるが、今後の研究では、このような国際会計基準への接近が従来の制度に及ぼす影響だけでなく、それが本当に適切なのかという視点も忘れず、検討をすすめていきたいと思う。

(所員/まなべ・あきひろ)

研究余滴

日韓国際経営シンポジウム

韓国の東西大学校と経営学部との共催で、『日韓における企業経営と経営環境』をテーマとした国際経営シンポジウムが、平塚商工会議所・大会議場にて約 80 名の参加者を集め開催されました。照屋経営学部長の開会の挨拶から始まり、小島准教授の司会にて、第一セッションは、小林照夫関東学院大学教授による「日本と韓国にみる文化的諸状況」の講演、東西大学校からは「韓国企業の国際ビジネス展開と諸問題」、「韓日の人的・物的交流の現状と今後の展望」が報告されました。第二セッションでは、海老澤教授による「環境型社会における経営の新展開」、李国際経営研究所客員研究員の「“韓日の物流・港湾の特質”の視点から」の報告のあと、後藤教授コーディネーターによるパネル・ディスカッションが開催されました。最後は、国際交流実行委員長の三村教授による閉会の挨拶で、3 時間半にわたる国際シンポジウムが無事終了しました。会議を準備・運営してくださった諸先生方、本当にご苦労さまでした。このような国際シンポジウムの開催は、学部全体にとって大きな知的刺激となりました。

経営革新フォーラム

今年もサロン・de・WINE (代表：海老澤教授) 主催のフォーラムが 2008 年 11 月 29 日 (土) 13:30 から、平塚商工会議所、中小企業相談所との共催で、平塚商工会議所 3 階大ホールにて開催されます。今年のテーマは「バルコニーから観る〇〇〇の風景～気づき、異なり、発見～」で、講演者は (株) 横浜赤レンガ前代表取締役の村澤彰氏、早稲田大学の山田真茂留教授、北海道工業大学の湯川恵子准教授の 3 名が予定されています。多くの市民、教員、学生の参加を募っています。

インターンシップ成果報告会

10 月 15 日 (水) に 2008 年度インターンシップ成果報告会が、4 会場を準備し盛大に開催

されました。第一会場 (斎藤先生司会) 報告者 15 名、第二会場 (小松先生司会) 13 名、第三会場 (石積先生司会) 13 名、第四会場 (浅海先生司会) 13 名と、計 54 名の報告発表がおこなわれました。中島学長をはじめ、インターンシップ先企業からも多数参加いただき、報告会終了後には情報交換・懇親会が開催されました。司会を務めていただいた斎藤先生、小松先生、石積先生ご苦労さまでした。特に夏のインターンシップ計画・実行、成果報告書作成から、今回の報告会まで獅子奮迅の働きをされた浅海先生に心から感謝いたします。

インターゼミナール大会

第 4 回インターゼミナール大会が 2008 年 11 月 19 日 (水) 13:30 から開催されます。今年は経営分科会で 20 チーム、会計分科会で 4 チーム、国際・社会分科会で 20 チーム、新規事業部門で 10 チームと、計 54 チームが参加する予定になっています。インゼミ大会は経営学部の重要な教育イベントとなっています。大会の審査員として、またゼミ学生の成長を見とどける機会でもありますので、できるだけ多くの教員の参加・ご協力をお願いいたします。

公開講演会：「心と脳の心理学」

国際経営学会主催の公開講演会「心と脳の心理学」が、2008 年 11 月 6 日 (木) 16:50~18:20 の予定で、湘南ひらつかキャンパス 1 号館 249 教室にて開催されます。講師は、NPO 法人カウンセラーズボランティアネットワークインターナショナル代表理事の樋口順子氏です。

第 2 回 SHC 外国語スピーチ大会

2008 年 11 月 26 日 (水)、経営学部・理学部共同主催による、外国語スピーチ大会が 13:30 から 1 号館 249 教室にて開催される予定です。

大会委員長は、経営学部金谷教授です。多くの学生、教員の参加をお願いいたします。